

英語の副詞とその下位分類

津 田 早 苗

English Adverbs and Their Subcategorization

Sanae Tsuda

序 論

副詞に関して、Ray Jackendoff は、次のように述べている。

In the literature of generative grammar, perhaps the least studied and most maligned part of speech has been the adverb.¹

Jackendoff が生成文法の研究に副詞に関するものが少ないと述べてからすでに10年以上経過した。この前後に、Nielsen (1972), Bellert (1977), 中右 (1980) 等の副詞に関する研究が公刊された。又、生成文法の成果もとりにれた記述的な文法である Greenbaum (1969), Quirk et al (1972) による副詞の総括的な記述もなされた。従来の伝統文法家による副詞の詳細な記述に加え、更に新しい研究が加わったと言える。

又、Thomason and Stalnaker (1973) のようなモンターギユ文法による副詞の記述などもあらわれ、副詞に対するアプローチの仕方は様々である。

この小論においては、文の構造を抽象的レベルでとらえ文の意味構造の観点から英語の副詞を分類する中右 (1980), Bellert (1977) 及び Jackendoff (1972) の副詞の分類を概観する。以上の分類と比較して、文を統語論的枠組でとらえ、記述的に英語の副詞を分類する Quirk et al (1972) を検討する。更に、英語の副詞の持つ特徴、分類についての両者の共通点、相違点を明らかにしたい。

第1章 意味に基づく分類

変形文法の発達には、文の分析を具体的にあらわれた文の構造のみに限らず、その論理構造にまで掘り下げて分析することを可能にした。しかし、実際にあらわれない抽象的な構造を仮定

1. Jackendoff (1972), p. 47.

することは、反対に様々な仮説が生れることになり、副詞の分類に関しても定説は確立されていないようである。

初期の生成文法のモデルでは、副詞は句構造規則で生成され、動詞句に支配されるもの、動詞句外にあるが文に支配されるもの、文の外にあるもの等に下位範疇化されていた。Nielsen (1972) の記述もそれに含まれよう。

これに対し、Jackendoff (1972), Bellert (1977) 及び中右 (1980) は、文の構造を更に抽象的なレベルでとらえ、副詞の分析を試みている。中右 (1980) は、発話としての文は、命題 (proposition) とモダリティ (Modality) の意味成分から成るとしている。命題とは、話者が切りとった現実世界の状況を叙述したものであり、モダリティは、発話時における話者の心的態度を叙述したものである。

このような文の構造を基本概念とする立場によって副詞を分類すると、副詞は命題の中にあるものと、命題の外にあるものに分類される。命題内副詞は、命題の一部を形造るのであり、命題外副詞は、命題に対するモダリティを表明するのである。伝統文法の用語を用いれば、文全体を修飾する文副詞が命題外副詞、その他の時、場所、様態をあらわす副詞が、命題内副詞であるとも考えられる。

中右 (1980) は、以上のように大きく副詞を命題外副詞と命題内副詞に分類して、文副詞の分類を、主として命題に対する関わり具合の違いによって、1) 価値判断の副詞 2) 真偽判断の副詞 3) 発話行為の副詞 4) 領域指定の副詞 の4種類に分類している。

中右 (1980) の分類は、Bellert (1977) の分類にならうもので、Jackendoff (1972) においては、1) 2) 3) はすべて、話者指向の副詞 (speaker-oriented adverb) に分類され、4) についての記述はなされていない。Bellert (1977) は、1) ~ 4) をそれぞれ 1) evaluative adverb (評価の副詞) 2) modal adverb (叙述の副詞) 3) pragmatic adverb (語用論的副詞) 4) domain adverb (領域の副詞) としている。

1) ~ 4) に属する副詞には、次のようなものがあげられている。²

1 価値判断の副詞

fortunately, luckily, happily, significantly, surprisingly, regrettably, unfortunately, unbelievably, not surprisingly, oddly enough, interestingly enough, to my regret, to our surprise, strange to say

2 真偽判断の副詞

perhaps, maybe, possibly, probably, certainly, surely, apparently, evidently, very likely, clearly, undoubtedly, unquestionably, no doubt,

2. 中右 (1980), pp. 162-163. 原文には、これに対応する日本語の副詞表現が加えられているが、ここでは省略する。

in my opinion, in my estimation, in all likelihood, to be sure, as I see it, as I understand, as far as I know, to the best of my knowledge

3 発話行為の副詞

honestly, seriously, strictly, truthfully, candidly confidentially, briefly, in short, in all fairness, to be blunt, to tell you the truth, generally speaking, put it frankly, if I may ask you, if I may say so, if you ask me

4 領域指定の副詞

technically, theoretically, basically, fundamentally, nominally, officially, superficially, ideally, in principle, by definition

Bellert (1977)によると、価値判断の副詞は、*factive predicate* であり、副詞を文からとって、いれてもその文の事実としての価値はかからないことを指摘している。例えば、次の例文 (1), (2) において左の *fortunately* のある文と、右の *fortunately* をとり去った文では、文のあらわす事実はかわらないのである。

(1) Fortunately John has come → John has come.

(2) Fortunately John has not come → John has not come. ³

又、価値判断をあらわす副詞を含む文は、次のような疑問文にはならないことが指摘されている。

(3) *Has John surprisingly arrived? ⁴

同様に真偽判断の副詞は、命題の真実性に対する陳述であり、次のような文がその内容を示していると考えられる。

(4) It is $\left. \begin{array}{l} \text{probably} \\ \text{possibly} \\ \text{certainly} \\ \text{evidently} \end{array} \right\} \text{true S}^5$

又、その性質上、価値判断の副詞と異なり、否定の副詞を使うことは出来ない。

(5) *Improbably, John has come. ⁶

語用論的副詞は、Jackendoff (1972) の言う、話者指向の副詞であり、話者が彼の話している内容に関しての態度を明らかにする副詞である。又、すべての語用論的副詞は、*frankly speaking* のように *speaking* を伴う表現にすることができる。しかし、これに対応する否定の副詞はない。

3. Bellert (1977), 342.

4. 5. 6. Bellert (1977), 343.

(6) *Dishonestly, I did it myself. ⁷

又、中右 (1980) は伝統文法におけるように接続副詞を一つの下位範疇としている。接続詞は、当然命題外副詞である。

5 接続副詞

hence, therefore, accordingly, consequently, however, nevertheless
moreover, otherwise, furthermore, in contrast, in addition, to
conclude, to begin with, on the contrary

次に命題内副詞に属するものとして次の5種類があげられている。

6 時, アスペクトの副詞

today, yesterday, tomorrow, the day after tomorrow, already, yet,
lately, recently, just now, nowadays, soon, in the near future,
before long

7 場所の副詞

here, over there, down there, in the park, across the street, high
above the ocean

8 頻度の副詞

always, usually, frequently, often, sometimes, rarely, scarcely
hardly, all the time, not infrequently

9 強意・程度の副詞

really, actually, definitely, simply, just, merely, indeed completely,
absolutely, quite, entirely, altogether, very much

10 様態の副詞

slowly, quickly, fast, politely, carefully, carelessly, strongly well,
cautiously, monotonously, enthusiastically

以上、中右 (1980) 及び Bellert (1977) の副詞及び副詞類 (adverbials) の分類を概観した。伝統文法等において、命題内副詞は、詳細な記述がなされているので、彼等の記述は、文副詞 (命題外副詞) について主としてなされている。彼等の理論の基となった Jackendoff (1972) では、文における副詞の本来的な位置によって副詞を、speaker-oriented adverbs (話者指向の副詞), VP adverbs (動詞句の副詞), subject-oriented adverbs (主語指向の副詞) に分類している。Jackendoff (1972) の副詞の分析は、副詞の分類そのものが目的であ

7. Jackendoff (1972), p. 56.

るというより、副詞を基底部門に導入することの方が、形容詞から変形によって副詞を導くより理論的に正しいと主張することに論点があるので、副詞の分類としては、すべての種類を網羅しているわけではない。以下に彼の分類を述べる。

1. VP adverbs

Jackendoff がここでとりあげている VP adverbs は、様態の副詞である。この副詞は、動詞の意味に何らかの意味をつけ加える働きをする。

- (7) a. John is speaking loudly.
 b. John is not speaking loudly.
 c. Is John speaking loudly? ⁸

上記の文, a, b, c, はそれぞれ、平叙文、否定文、疑問文であるが、John is speaking という命題をあらわしている点では一致している。

2. Subject oriented adverbs

これに対し、主語指向の副詞を含む文は、それを否定した文とでは、VP adverb の場合には異なり、同じ命題をあらわすことはできない。

- (8) John $\left\{ \begin{array}{l} \text{cleverly} \\ \text{wisely} \\ \text{carefully} \end{array} \right\}$ dropped his cup of coffee.

上の文は、John dropped his cup of coffee という内容を持っているが、

- (9) John $\left\{ \begin{array}{l} \text{cleverly} \\ \text{wisely} \\ \text{carefully} \end{array} \right\}$ did not drop his cup of coffee. ⁹

は、John did not drop his cup of coffee. という内容を持っている。

3. speaker-oriented adverbs

これは、文副詞であり、Bellert (1977) 及び中右 (1980) では更にその下位区分が行なわれた。又、Jackendoff (1972) は、語頭及び助動詞の位置にしかおくことの出来ない副詞は、speaker-oriented adverbs であると分析している。¹⁰

文の意味論的あるいは論理的な構造による副詞類の分類の例として、中右 (1980)、Bellert (1977) 及び Jackendoff (1972) を概観したが、これ等の分析が全く、統語的基準に頼らないということではなく、意味に基く分類も深く統語構造と関連していることがわかる。統語的記述と意味的記述は分離するのが困難であり、そのどちらが欠けても文法的記述としては不十分であると言える。伝統文法家がある時は、意味基準を頼り、ある時は、統語的基準によって分析を行なったことは、言語の性質をあらわしているとも言えるし、又、現在の様々な文法モデルの存在理由をも示しているように思われる。

8. 9. Bellert (1977), 339—340.

10. Jackendoff (1972), p. 50.

第二章 統語的基準による分類

Quirk et al (1972) も、単独の副詞だけでなく副詞相当句 (adverbials) すべてを分析の対象としている。Quirk et al (1972) は、Greenbaum (1969) の副詞類の分析に基づいているもので、副詞類を、1. adjunct (付接詞) 2. disjunct (離接詞) 3. conjunct (合接詞) に分類している。

1. adjunct

adjunct は、中右 (1980) の命題内副詞に相当するもので、文の構成の中にある副詞である。Quirk et al (1972) には、adjunct の基準が三つあげられている。

a. adjunct は否定の叙述文の文頭には使われない。

- 1) Quickly they left for home.
- 2) *Quickly they didn't leave for home. ¹¹

b. adverbial が選択疑問文の中で使われることが可能ならば、adjunct である。

- 3) Does he write to his parents because he wants to or does he write to them because he needs money. ? ¹²

c. adverbial が選択的な否定文で、対照することが出来れば adjunct である。

- 4) We didn't go to Chicago on Monday, but we did go there on Tuesday. ¹³

これに対し、disjunct と conjunct は、次のような特徴を持っている。

a. disjunct と conjunct は、否定文の文頭にもおくことができる。

- 5) Perhaps they didn't leave for home. ¹⁴

b. 選択疑問文において他の副詞類と対比されない。

- 6) *Does he write to his parents since he wants to or does he write to them since he needs money ? ¹⁵

c. 選択的な否定文において他の副詞類と対比されない。

- 7) *We didn't go to Chicago, to John's amazement, but we did go there, to Mary's amazement. ¹⁶

上記の共通点を持つ disjunct と conjunct は、次の点で異っている。

a. conjunct は、接続詞の役割をする。

b. 次のような疑問文の答として用いることの出来るのは、disjunct であり conjunct ではない。

11. 12. 13. Quirk et al (1972), pp. 421—422.

14. 15. 16. Quirk et al (1972), p. 422.

8) Will he probably be there tomorrow ?

A: Will he be there ? B: Yes, probably.

9) I sent him a personal invitation. He will therefore be there tomorrow.

A: Will he be there ? B: *Yes, therefore. ¹⁷

統語的な特徴を述べる手がかりの1つに、語順があるが、Quirk et al (1972) には、文における4つの副詞の位置が指摘されている。

I—initial position 文頭

M1—medial position 1 助動詞の前

M2—medial position 2 動詞の前

E—end position 自動詞のあと、又は、目的語や補語のあと ¹⁸

上記の文における位置は、それぞれの副詞を特徴づけている。

次に、三つの副詞類のそれぞれについて述べる。adjunct に含まれる副詞に関しては、中右(1980), Bellert (1977), Jackendoff (1972) のいずれも、Quirk et al (1972) 程詳細な分類をしていないので、ここにそれぞれの統語特徴を述べる。

Quirk et. al (1972) は、adjunct を次の表のように、8種類に分類している。

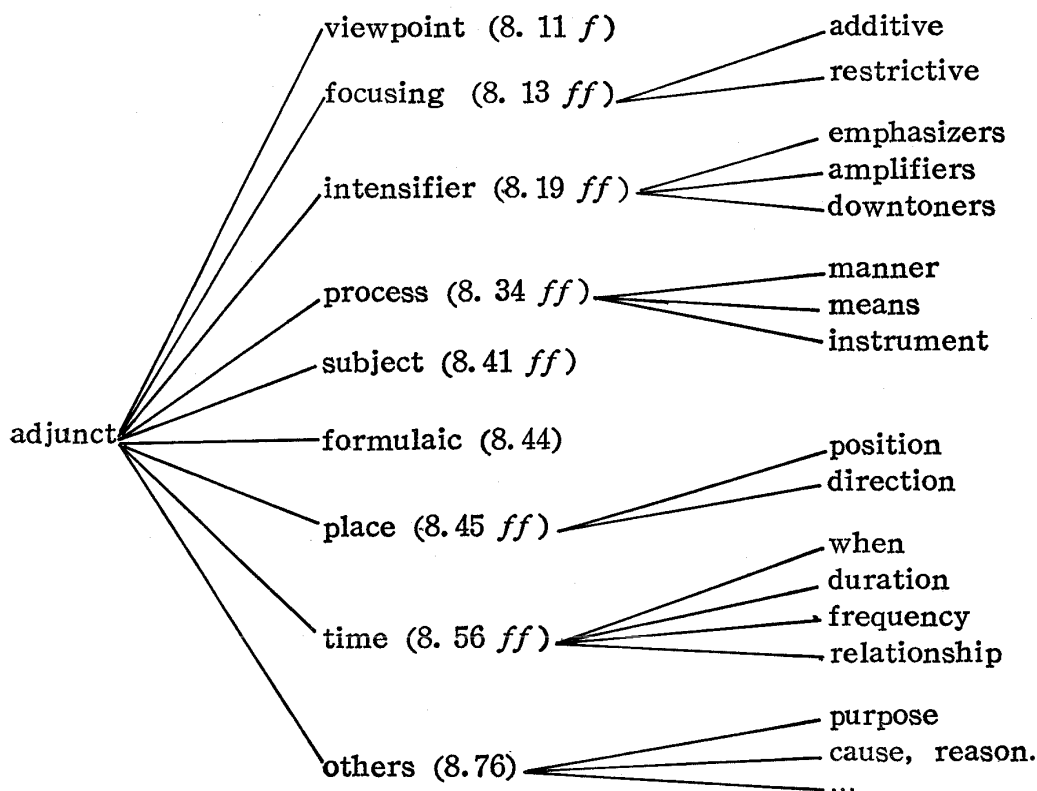


図1 adjunct の分類 ¹⁹

17. Quirk et al (1972), p. 424.

18. Quirk et al (1972), p. 426.

19. Quirk et al (1972), p. 429. それぞれの adjunct の下位分類のあとにつけられている数字は、それらが論じられている節を示している。

1. Viewpoint adjunct

形容詞に *-ly* を加えることによって作られる副詞が多く, *if we consider what we are saying from a [adjective] point of view* というパラフレーズの出来る副詞がここに分類されている。位置は, **I** をとることが多いと記述されている。副詞が修飾を受けないという点を除いて *adjunct* の特徴を持っている。

10) *Morally, they have won a victory.*

**Very morally, they have won a victory.*²⁰

この *viewpoint adjunct* に相当するものは, 中右 (1980), Bellert (1977), Jackendoff (1972) のいずれにも特別な分類としてあげられていない。

2. focusing adjunct

これは, 伝達された内容を, 焦点をおいた部分に限定する働きをする *adjunct* で, 焦点をおいた部分を制限する *restrictives* と, 焦点を広げる *additives* に更に分かれ, *restrictives* は更に *exclusives* — *alone, exactly, exclusively* …… と *particulizers* — *chiefly, especially, largely* …… に分類され, *additives* には, *again, also, either* …… が分類されている。

この *focusing adjunct* に関しては, 上記の生成文法家達がどのように扱っているかは明らかではない。又, その位置に関しては, *focus* を与える要素に近くおかれるので決まった場所は指定出来ない。副詞とその *focus* の及ぶ部分に関しては, ここでは論じない。

3. intensifiers

intensifier は更に次のように分類されている。

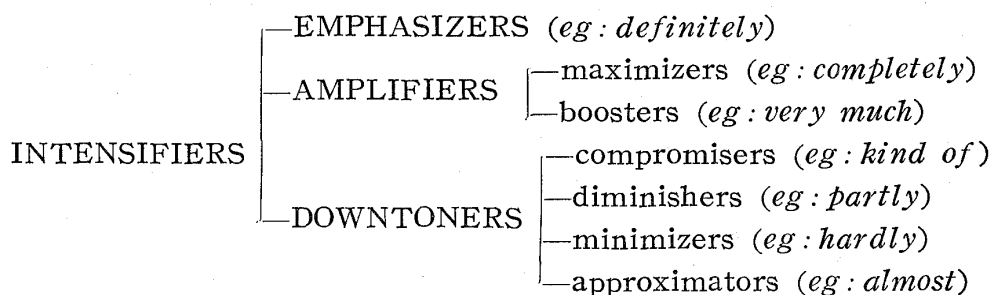


図2 *intensifier* の分類²¹

intensifiers は, 文中のある部分を強調したり, 反対に弱くしたりする役割をする副詞で, 後に述べる *disjunct* としても用いられることが指摘されている。しかし, *adjunct* として用いられている場合は, その副詞を文頭におくことは出来ない。上記の *focusing adjunct* と同様に, *intensifier* もどこにその強調点が及ぶか等については, 更に検討されなければならない。これ等について, 上記の生成文法家達は, 特別の分類をしてはいない。

20. Quirk et al (1972), p. 430.

21. Quirk et al (1972), p. 439.

4. process adjunct

この adjunct は、動詞によって示される過程を何らかの方法で記述する副詞類で、

a. manner b. means c. instrument に更に分類されている。

様態の副詞に関しては、stative verb との共起性が指摘されている。これらの副詞の最も一般的な位置は E である。三人の生成文法家に限らず様態の副詞は、動作動詞との共起性等の点で従来から議論がなされてきた。Quirk et al (1972) においては更に、manner adverb が、他の adjunct の要素を持つことも指摘している。process adjunct も位置は E である。

5. subject adjunct

この adjunct は、ほとんど、様態の副詞と共通で、動詞によって示される行為や状態に関する主語に対して言及をする副詞類である。更に、subject adjunct は、Group A: General Group—resentfully, with great pride. Group B: volitional Group — deliberately, purposely 等が含まれる。これらは、Jackendoff (1972) の subject-oriented adverb に相当すると言える。

6. formulic adjunct

これは、ていねい表現をあらわす副詞類で please, kindly 等が含まれ、その位置は、M₂ である。

11) He kindly offered me a radio.

この副詞類についても、上記の三人の分類はふれていない。

7. place adjunct

place adjunct は、限られた副詞類が含まれている。position と direction に分類されているが、同時に両方を意味することが多い。

place adjunct には、様々な統語特徴があるが、ここではこれ以上述べない。

8. time adjunct

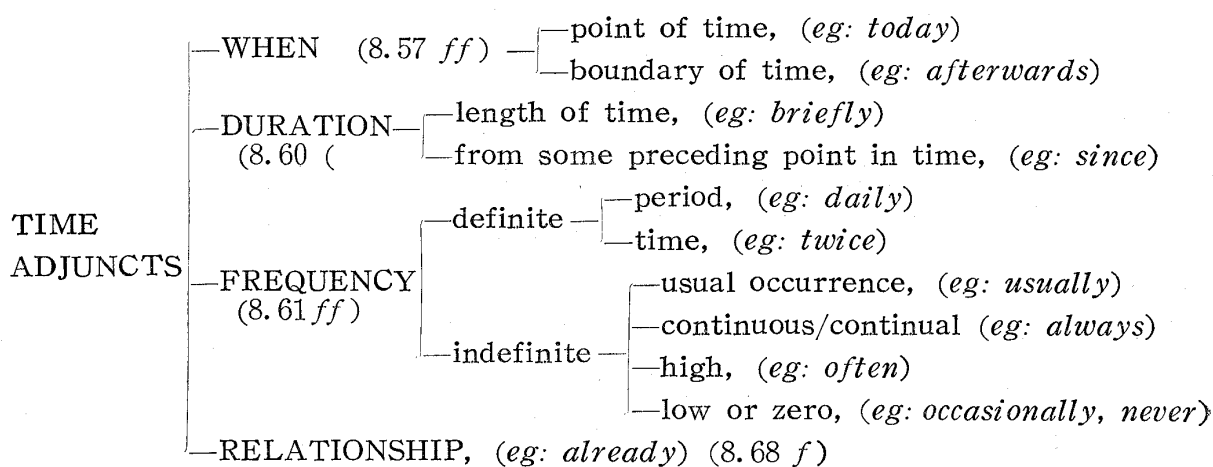


図3 time adjunctの分類²²

22. Quirk et al (1972), p. 482.

この adjunct も, place adjunct と同様に伝統文法家によって詳細に研究されてきた。

Quirk et al による分類は, 前頁の図3に示されている。

time adjunct の下位分類のうち, when adjunct というのは, when で始まる疑問文に対する答として使われる副詞類で,

A: When did he arrive ?

B: Quite recently, Last night, At five o'clock, While you were at the library
のようなものである。

duration adjunct は, how long で始まる, 疑問文に対する答として使われる副詞類である。

frequency adjunct には, how often で始まる疑問文に対する答として使われる副詞類が含まれる。

relationship adjunct は, 時の表現に関係のある副詞類で上記のどれにも含まれないものである。

次に, Quirk et al (1972) の disjuncts の分類を中右 (1980) その他の分類と比較してみる。次の表は, Quirk et al (1972) の disjunct の分類を示している。

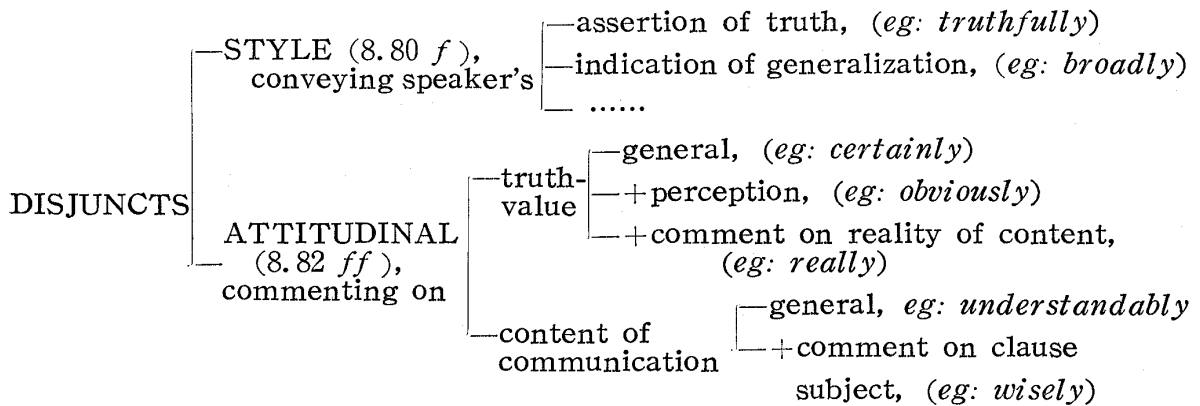


図4 disjunct の分類²³

この分類における style disjunct は, Bellert (1977) の Pragmatic adverb 又は, 中右 (1980) の発話行為の副詞に相当する。そして, attitudinal disjunct は, Bellert (1977) の evaluative, modal, domain adverb に対応し, 中右 (1980) の価値判断の副詞, 真偽判断の副詞・領域指定の副詞にほぼ相当しているといえる。

Conjunct に関しては, Quirk et al (1972) の分類が総括的であるのに対して, 中右 (1980) その他の分類は, そのほんの一部を述べたものである。又, conjunct は, 副詞としての記述だけでは不十分で, 接続詞との関連も述べなければならないのでここではその分類を示すだけにとどめる。

23. Quirk et al (1972), p. 508.

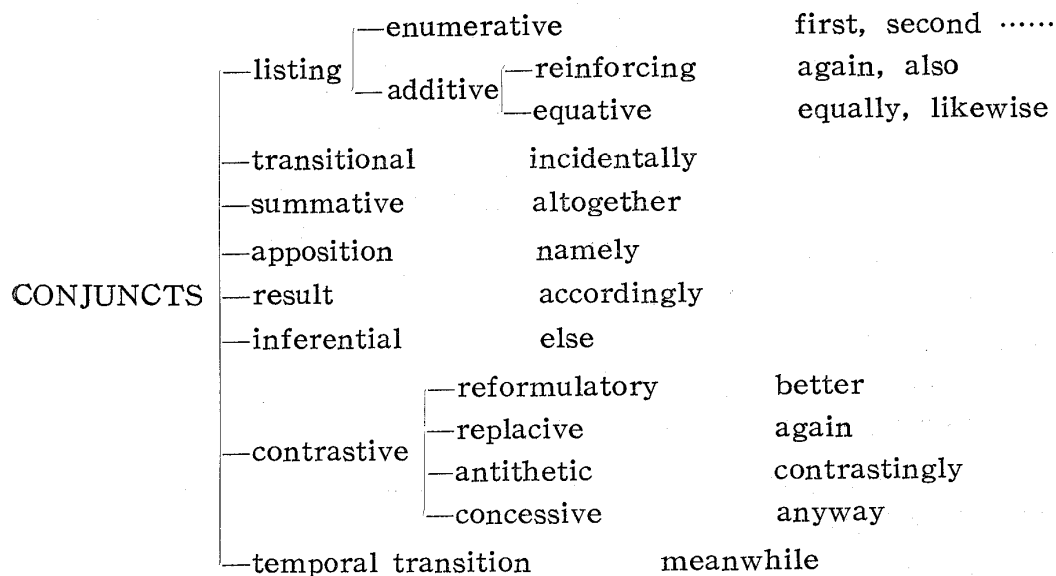


図5 conjunct の分類²⁴

結 語

以上、文の意味又は論理構造から副詞の分類を考察した。はじめに Jackendoff (1972), Bellert (1977), 及び中右 (1980) を構観し、更に、記述的な Quirk et al (1972) の分類と比較した。

文の構造の抽象的レベルの相違、文法記述の目的の相違にもかかわらず、従来から伝統文法でなされてきた文副詞、接続副詞、文の中の要素を修飾する副詞の区別は、それぞれの文法記述に見られた。その下位分類においては、様々な統語特性、意味特性が見られたが、それらは多岐にわたり、副詞という品詞の持つ多様性を示している。

本論では、どのような立場にたつ副詞の記述、分類が言語の記述として妥当であるかの判断は、あえて示さなかったが、今後データを集め、その各々について妥当性を検討することを課題としたい。又、抽象的な言語理論に至らなくても、Quirk et al (1980) のような広範なデータをまとめた文法も違った意味で大変貴重なものと思われる。

副詞が品詞として一つにまとまるものであるか、別々の機能を有するいくつかの品詞にかかれるかもどのような文法の枠組で副詞をとらえるかによって異なると思われる。

参 考 文 献

- Bellert, Irena (1977) "On Semantic and Distributional Properties of Sentential Adverbs," *Linguistic Inquiry* 8, 337-51.

24. Quirk et al (1972), pp. 520—522.

- Greenbaum, Sidney (1969) *Studies in English Adverbial Usage*.
London: Longman.
- Jackendoff, Ray S. (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*.
Cambridge, Mass: MIT press.
- 中右 実 (1980) 『文副詞の比較』日英語比較講座2文法, 大修館, pp. 157-219.
- Nielsen, Don Lee (1972) *English Adverbials*. The Hague: Mouton.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1972) *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman.
- Schreiber, Peter (1971) "Some Constraints on the Formation of English Sentence Adverbs," *Linguistic Inquiry* 2, 83-101.
- . (1972) "Style Disjuncts and the Performative Analysis,"
Linguistic Inquiry 3, 321-40.
- Thomason, R. R and R. Stalnaker (1973) "A Semantic Theory of Adverbs,"
Linguistic Inquiry 4, 195-220.